

民俗芸能研究における「地域」

橋本裕之

- 一 はじめに
- 二 民俗芸能の地域差と地域性
- 三 民俗芸能の分布と伝播
- 四 民俗芸能の伝播と変容
- 五 構成される「地域」
- 六 おわりに

論文要旨

本稿の目的は民俗芸能研究が「地域」をいかなるものとして理解しているのか、その消息を検証するところにある。こうした関心に沿って民俗学という地域性論をとりあげたばあい、ある奇妙な偏向に気づかされることになる。民俗芸能研究はいかなる脈絡からも、地域差と地域性を主要な課題として位置づけていないのである。それは筆者のみたところ、民俗芸能の地域差がしばしば伝播によってもたらされた結果として十全に説明されてしまうからであった。民俗芸能はどうやら地域性論にふさわしくない、つまり地域性に規定されにくい対象であるらしい。

しかしながら、伝播が民俗芸能の地域差をもたらすものだとしても、自然的な伝播のみをもって民俗芸能の諸相を説明してしまっているものか。ひとたび民俗芸能の芸能史的位相を視野におさめたら、民俗芸能が組織的な伝播によって当該地域にもたらされた消息を無視するわけにはいかないはずである。した

がって、民俗芸能の地域的位相はむしろ芸能の祖型を指標として用いる試みによって浮かびあがる、いわば変容の諸相にこそとめられなければならないかった。

そのばあい、「地域」は必ずしも個々の民俗社会にかぎらない。「地域」は対象の持つ性格にそくしながら、あくまでも可変的に設定されて然るべきなのである。というのも、民俗芸能にまつわる「地域」は民俗芸能に対する人々の熱情によって構成される可能性を持っている。「地域」はじつのところ、人々の熱情によってもたらされた結果のひとつでしかなかったのかもしれない。こうした視座は演者や演技の実際から「地域」を問いなおすものであり、あらかじめ「地域」を前提してしまふ発想を根本的に転換させる契機たりうるものである。しかも、民俗芸能の地域性がそこから得られるものだとしたら、地域性論じたい批判的に検討もしくは再編されなければならないように思われる。